令和８年７月全国知事会議「鳥取宣言」

今日世界は動乱の嵐の中にあり、我が国も人口減少や少子高齢化が加速する上、円安や物価高はじめ激流にもまれている。技術革新の末に、今や人工知能が人間を超えるシンギュラリティまでもが現実化しつつある。誰も想像できなかった人類の新たなステージの到来だ。しかし、だからこそ我々は、歴史の断層を吹き抜けていく突風に立ち向かい、希望の高みを築いていく使命を果たしていかなければならない。

鳥取砂丘は、無数の微小な砂粒の集合体だ。秒速約五メートルの風で砂は空中に飛び出しては落下する「跳躍」を繰り返し、そこに美しい「風紋」が生まれる。台風のような厳しい風雨が吹きすさぶと、踏みとどまった砂により「砂柱」が形成される。風に乗り、風に抗い、一つ一つの小さい砂粒は、力を振り絞って自己変革の連鎖を繰り返しているようだ。十万年かけて築かれた希望の高み「砂丘」の姿に、風にさらされながら課題解決へ挑み続ける地域と住民の実相が重なる。

鳥取県は最も人口が少ない県だが、手話言語条例を初めて制定し、これが全国の自治体の賛同を得、更には国を動かし昨年の手話施策推進法成立への起点となった。地域が自ら正しいと信ずる施策を自ら果敢に実践すれば、その実例を種に社会全体の改革が進む。これこそが、民主主義社会における「地方自治の効用」にほかならない。

ここ鳥取に４７都道府県から集う我々知事は、日本の当面する課題克服と経済・社会の成長・発展を希求し、誰もが未来への希望を持ち生き生きと暮らせる地域社会と日本の実現に向けて、一致結束して以下のとおり邁進していく決意である。

○　人口減少問題は我が国の最重要課題である。そのため国に対しては、国民的な議論の下、価値観・パラダイムの転換を伴う長期的な国家ビジョンを取りまとめるとともに、その実現に向けて、国・地方の役割分担や公費負担のあり方の変革など、社会の基本設計（0S）のバージョンアップに取り組むことを求めていく。

また、全国知事会としても、この問題を克服し、次の世代も夢や希望を描くことができる未来を拓くため、「人口戦略推進チーム」を新たに設け、人口動態や少子化等の要因を分析し実効性ある施策を考え実行していくとともに、経済団体、労働団体など各界各層と連携して国民運動を展開するなど、国と車の両輪となってこの国の構造変革に向け力強く行動を起こしていく。

○ 「強い経済」の構築に向け、地域経済の持続的な成長を支える人材の確保・育成を地域未来戦略の実効性を高める中核的課題として位置付け、高校教育改革、スタートアップ人材の育成、大学や企業等と連携したリスキリングや能力開発への支援などを推進する。併せて、国に対し、人材の地方還流、移住・転職・副業兼業等を通じた広域的な人材循環の促進、教育における構造改革、大学等の機能強化及び定員配置の適正化など、地方の成長を支える人材戦略を国家戦略として強力に推進することを求めていく。

○ 少子化・人口減少が急速に進む我が国にとって、今後の発展に向けて、年齢や性別などの違いにかかわらず、全ての人が個性や能力を最大限発揮できる社会の形成が急務である。

固定的な性別役割分担意識や無意識な思い込み（アンコンシャス・バイアス）の解消のための取組など、ジェンダー平等の実現に向けた施策を、政府と都道府県が一体となってこれまで以上に強力に推進していく。

○ 所得や居住地域等に関係なく誰もが安心して子育てできる環境を整備するため、子ども医療費助成や幼児教育・保育の完全無償化など、ナショナルスタンダードの観点を踏まえた全国一律の制度を国に求めていくとともに、地方はその実情に応じたきめ細かな施策を実施し、国と地方が車の両輪となって取り組んでいく。

○　高齢者人口のピークを迎えると見込まれる 2040 年を見据え、地方自身も責任を持ち、国と連携しながら全ての世代が安心できる全世代型社会保障の構築に向け取り組んでいく。

また、継続する物価高や人件費の上昇といった社会経済情勢の変化等も踏まえ、地域の実情に応じた質の高い医療・介護などのサービスを効率的・効果的に提供できる持続可能な体制の確保を国に求めていく。

○　人口減少社会においても、持続的に必要な行政サービスが提供できるよう、「縮小」の連鎖に陥らない「スマートシュリンク（賢い縮小）」の視点を取り入れ、効率的な行政サービス提供体制全体の再構築を目指し、国や地方の行政機関相互の役割分担の見直しを含めて、今後の地方のあり方について探求していく。

○　人口減少を見据え、AI トランスフォーメーション（AX）社会への転換に的確に対応し、AI の利活用を通じた行政サービスの高度化、地域産業の生産性向上、人手不足への対応を進め、地方の持続可能性を高めていく。

鳥取県東部に位置した因幡国には、今の知事に相当する国守として 758 年に大伴家持が着任し、翌年元日国庁において「新(あらた)しき年の始の初春の今日降る雪のいや重(し)け吉事(よごと)」と謳い上げ、国と地域と人々の安寧を祈った。この歌は後に万葉集の最後を飾る。

「吉事」をもたらそうとする営みに、今も昔もない。我々は、山積する課題に臆することなく、志と叡智と行動をもって未来への道筋を切り拓く。鳥取の地から望むどこまでも青い空と海を前に、現場主義の精神と実践で「日本を動かす」挑戦へ今こそ立ち上がることを宣言する。